

研究船の生活と洋上のそば打ち

江戸流手打ち蕎麦鵜の会・江戸ソバリエ
北川 庄司



学術研究船・白鳳丸

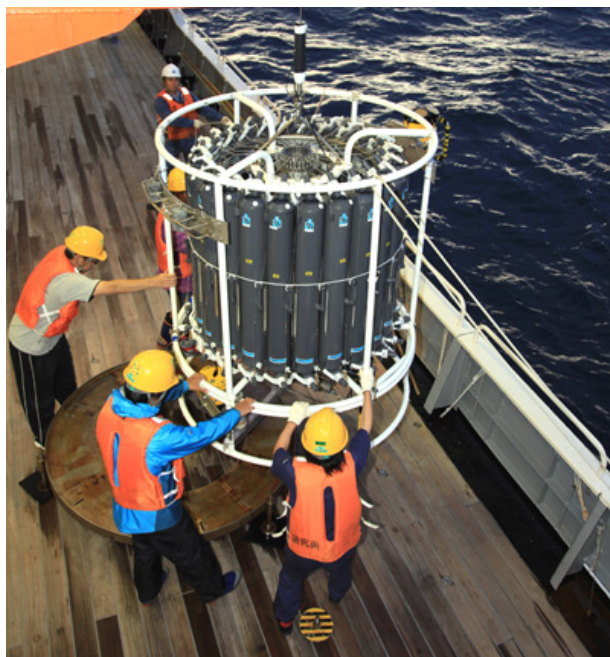
昨年、チーム「Tokyo Soba Meister-Kanrinmaru」によるサンフランシスコでのそば打ちボランティアに参加させていただいた。そして今年はかつての咸臨丸航海同様、北太平洋を往復する研究航海に乗船し、サンフランシスコ沖の船中でのパーティーで手打ちそばを提供した。

乗船した船は海洋研究開発機構所属の学術研究船白鳳丸。白鳳丸は総トン数3,991トン、全長100m、10室のラボを持ち、航海速度は16ノット、通常の航行はディーゼルエンジンで行うが、観測作業中は精密な操船のできる電気推進に切り替えて航行するハイブリッド船である。東京大学大気海洋研究所が運用し、僚船の淡青丸と共に全国の研究者に利用されている。乗組員54名、研究者35名の計98名が定員で、1年の半分以上の日数を世界中の海をターゲットに研究航海を行っている。現在の白鳳丸は2代目で、1989年に進水した。その年、130日間に及ぶ世界一周航海に赴いたが、縁あって私もその全航海に乗船させていただくことができた。

今年私が乗船したKH-11-8と名付けられた研究航海は8月12日に東京晴海を出港し、海洋観測を行いながら9月5日にサンフランシスコに入港。11日に出港して再び観測作業をしながら10月4日に晴海に帰港する計54日間の航海だった。航海の目的はごくおおざっぱに言えば海流の調査である。



流向流速計の設置作業



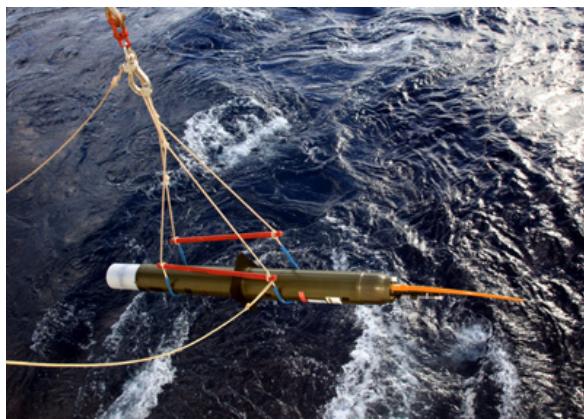
CTDと多筒採水器による観測

海流は主に風で起こるものと対流で起こるものがあり、それが地球の自転の影響を受けながら複雑に影響し合っている。大循環という地球規模の対流は極域で冷やされた海水が沈み込み、赤道付近で上昇するものだが、上昇しないでそのまま深層流となって地球の反対側まで到達する流れもある。約1000年という時間をかけた気の遠くなる長いスケールの対流だ。そして海水は空気よりもはるかに熱容量が大きいので、海流が極域と赤道域の温度差を和らげ、地球の気候変動を制御する重要な働きをしていると言われている。

また、海に生きる生物たちにとっても海流は重要なものだ。最近、白鳳丸の航海で日本鰻の卵の採集に成功したと報道された。鰻研究者の悲願だった日本鰻の産卵場所の特定がマリアナ諸島沖であることが実証されたのである。しかし、孵化した鰻の稚魚は自力で泳いで日本や中国にたどり着けるわけではない。まず北赤道海流で西に運ばれ、黒潮に乗って北上するものと、ミンダナオ海流に乗って南下するものに分かれる。残念な

がらミンダナオ海流で南に運ばれた稚魚はすべて死滅してしまい生き残ることはできない。幸運にも黒潮で北に運ばれた稚魚だけが成長し、親鰻として再びマリアナ諸島沖の海に戻ることができるのだそうだ。

海流を測る手段は色々ある。流向流速計を海底からロープで係留設置する方法、フロート（プログラム、あるいは陸上からの指令で浮上、潜航をくり返し、その間に計測した様々なデータを衛星を使って送ってくるロボットブイ）を放流してその位置を追跡する方法、CTDという温度、圧力、塩分を計測する機械を海中に下ろして、密度の鉛直分布を測る方法などが一般的な手法になっている。密度を測るといのは海の天気図を作る作業だ。気圧の差があるところに風が生まれるように、海水も密度の差



アルゴフロートの投入

白鳳丸は伝統的に昼食が洋食、朝食と夕食が魚中心の和食メニューとなっている。外国人の研究者も多く乗船し、宗教上の理由等で食材が制約されることもあるので、司厨長は気が抜けない。食事は航海の楽しみの一つだが、海が荒れて食欲がなくなると3度の食事が苦痛になり、重い足取りで食堂に向かうことになる。船酔いはしばらくすると慣れて平気になる人と、最後まで慣れないで苦しむ人がいる。長い航海中、ろくに食べられずに栄養失調になった人もいたと聞いた。私などは逆に航海中は食欲旺盛になり、必ず太って下船することになるので、その後はダイエットに励まねばならない。



船上でのそば打ち

航海によっては洋上セミナーなどを企画することもある。単調な船上生活に変化をつけようと、誕生会などもその都度開かれる。そしてかならず行われるのが入港前

があるところには流れが生じるので、地衡流計算という方法で流れを知ることができる。

観測船は24時間休まず観測作業をするので研究者も乗組員と同様、3交代制で仕事をする。4時間働いて8時間休むという体制だ。0時～4時、12時～16時までの勤務をゼロヨンワッチと呼び、4時～8時、16時～20時までの勤務がヨンパーワッチ、20時～0時、8時～12時までの勤務をパーゼロワッチと呼ぶ。

おおむね物理系の観測作業というのは単調な仕事である。衛星テレビも日本近海しか映らないし、ネットもできない。陸上とはメールのやりとりはできるが、ブロードバンドのインターネットは衛星回線の制約で利用できないのだ。乗船中の気晴らしと言えば酒を飲むことと、読書やDVDの映画を見ることくらいだろうか。そうそう、毎晩のようにカラオケで発散していた研究者もいた。朝になると声が枯れているのでバレバレだ。



赤道祭



赤道祭風景・流しうどん



赤道祭風景・南極のかき氷

の打ち上げ会だ。寄港地では乗船研究者の交代があるので何人かが下船する。そこで入港・帰港前夜はお別れパーティーを兼ねた観測作業の慰労会が開催されることになる。私はそのパーティーのセッティングを頼まれることが多く、手打ちそばの提供を20年近く続けてきた。木鉢や延し板など、そば打ち道具一式は航海専用のセットがあり、観測機材と一緒に必ず積み込むことにしている。

釣りあげたイカの墨でイカ墨そばを打ったり、船上でのそば打ちはいろいろな思い出があるけれど、一番印象に残っているのは1994年の南極観測航海で打った年越しそばだろう。南極にたどり着くためには、吠える40度、狂う50度、叫ぶ60度といわれる暴風圏を抜けなくてはならない。南極航海での大晦日は南緯54度の嵐の海で迎えることになった。麺棒は吹っ飛ぶ、身体は投げ出されるというスポーツ競技のようなそば打ちだったけれど、楽しかった思い出の一つになっている。

船特有のイベントと言えば赤道祭がある。赤道祭は海の神様から赤道を通過する鍵をいただくと言う儀式だが、白鳳丸では女性と男性が入れ替わるコスプレでやるのが習わしになっている。南極からの帰路の赤道祭では私の打ったうどん、流し素麺ならぬ流しうどんを楽しんだ。ま

た、南極で採集した氷で作った贅沢なかき氷の屋台を出した研究者もいた。

私が技術職員として東京大海洋研究所（現大気海洋研究所）に採用されて以来37年、その間いろいろな機関の観測船に乗船して仕事をしてきた。海上で過ごした日数は延べ6年になる。そしていよいよ来年が最後の年、洋上でのそば打ちも来年のシアトルからの北太平洋横断航海で打ち止めである。